

エンデチャ(悲歌、哀悼歌)分析譜

作曲:フランシスコ・タレガ
分析譜製作:市川亮平

囲み文字:調性、重要な終止形

————→:音の繋がりや音の進行方向、その声部の次の音がどれかを示す。順次・跳躍進行や並行・逆行進行にも使用。

主・属・導:主音・属音・導音を表す。

カ・イ:非和声音である経過音(カ)、倚音(イ)を表す。特に曲の前半、これらが小節的動機終了箇所の強拍に配置され、終止感に大きく影響を及ぼしている。

⌒:曲を構成する小さなまとまりを表すスラー。今回は小節的動機、文章に例えるなら「。」で終わるまとまりを表す。
この楽譜に限っては、その最後には終止形のどれかが用いられている。
ギターの技巧の一つであるスラー奏法(ハンマリング・オン、プリング・オフ)とは異なる。
この楽譜では点線のスラーでギターのスラー奏法を表した。

順次進行:ドレミファソ、ドシラソファ等、音階を順番に上がったり下がったりしている箇所を表す。

跳躍進行:ドミソ、ドファラ等、音が跳躍している箇所を表す。

4度の跳躍、6度の跳躍、7度の跳躍、8度の跳躍等、跳躍する音程毎に得られる感覚が異なると思うので、それらをしっかり分類する。

^I _V₇等のローマ数字:和音がその調の何番目のものかを示す。それによりその調の役割が判断できる。
右上の小さい数字は転回形。右下の小さい数字は追加で加えられている音を示す。右上の数字が無いなら最も安定的な基本形となる。
ただし、この曲は単旋律進行が多いため、複数の和音を当てられる箇所もある。
私はその箇所に和音を当てると、感覚的に表現の自由度が減るので意図的に和音を当てはめていない部分もある(例:1小節目)。

♯/は和音の根音省略。上の小さなvはVの副5の和音である事を示す。上のローマ数字がivならIVの副5。

IV 和音記号の下の小文字ローマ数字は保続音を示す。iなら主音の保続低音。

vなら属音の保続低音となる。なお、保続高音、保続内声等も時代により存在する。

(根)(3)(5):その和音の高音位、最高音が和音のどの音かを示す。和音を示すローマ数字の上に書かれる。重要な箇所のみ記入。

a:やF: 和音記号の前に付き、何調の和音なのかを示す。調性が曖昧な時に使用する。転調部分はイ短調であり、二短調とも取れるという場合もある。

私はそう言う箇所を「調性の揺らぎ」と表現している。

a:イ短調、d:二短調、F:へ長調、C:ハ長調、と言うように小文字は短調、大文字は長調を表す。

⌒:小節的動機を構成する更に小さなまとまり、部分動機を表す。
例えるならば小節的動機が「。」で締めくくられる文、部分動機が主語や述語。
※名詞・助詞と言っても良いかもしれないが、今回はそれよりほんの少し範囲を拡げたほうが適切だと判断した。

⌒:減5度などの特別な響きを持つ音程、響きに注目して欲しい箇所を表す。
基本的に不安定な響きを持つ和音に使用している。

全体の特徴 1:単音と和音の対称性が目立つ。それは軽さと重さ、自由と抑制と言った対比的魅力を生み出している。
2:繰り返しはあるものの15小節と非常に短い小品。
前半の、2小節で1つのまとまりとなる小節的動機は、どれも単音で始まり、和音で収められる。
後半もその要素はあるが、和声的な進行がより強くなる。また和音は8分音符単位で変化し、和声変化の緩やかな前半と後半の対比が見られる。
3:終止形は和音で作られているが、属和音または経過音や倚音と言った非和声音を強拍に配置し、その裏拍である弱拍に主和音、主和音の核となる音が配置されている。
そこに終止感を薄め、終止と継続の両立を目指すような作曲意図を見る。
まとめ:以上のように細かな作曲的工夫がなされ、短いながら奏者の創意を刺激する非常に魅力的な曲となっている。

二短調

小節的動機 動機a

完全4度上行跳躍 完全4度下行跳躍 順次下行

主和音基本形根音高位

動機b(a逆行)

1:アウフタクトの「ラ」を二短調属音と捉えるかは奏者に任されるだろう。
私は軽くだがそれを意識する。それにより属音→主音の上行跳躍の連結を丁寧に弾きたくなる。
具体的にはラーレが二短調において重要な役割を持つ音として意識してもらえよう、少し伸ばす。
設定テンポにより異なるが、私はラは0.7秒、レは0.5秒程度鳴らし、
その後の下行跳躍のラ以降は0.4秒程度鳴らす。
緩急法のルール「遅くしたら速くする」に則するため、滑らかな順次下行であるため、
この2点から順次下行で少し速度を上げる。
単音進行であり、和音の特定が難しいため2拍目の和音は指定していない。
和音を感じる方は2拍目も検討すべきだが、私はそれをするとうるささが少し失われるため行わない。
単音進行の3小節目を見るに1拍目裏に新たな和音を感じるポイントがある様にも思う。
その場合この小節1拍目裏に配置されるのはVが妥当であろう。
強弱表現は音程の高低が音の強さに比例すると考えてよい動機だと思う。
つまり音が高ければ強く、低ければ弱く表現する。
ただし、短調で始まり、物悲しい雰囲気での単音での進行のため
強弱に差を付け過ぎないように気をつけたい。
強すぎる音量は「活気」「怒り」「興奮」などを聞く人に与えてしまう。
冒頭はその様な感情・ストーリーとは異なると考える。
その様な理由から1拍目拍頭、主音であり、動機最高音であり、跳躍到達音であるレは
前後より音量を1か2だけ上げ、ビブラートなどで印象付けると効果的。

2:初めて和音が現れる。旋律は2拍目まで続く
今までの繊細な単音進行から非常に良く鳴る6弦開放し、
旋律を含む次の3音の重音。強くなり過ぎないように注意が必要。
動機の終わりとして柔らかく収めたい。
順次下行で主音に向かう旋法的終止形の要素があり
それを意識する。しかし、単音→和音はこの曲の特徴であり
和音の性質も意識しなければいけない。
私は1拍目表拍を強引ではあるが
1.主和音基本形 経過音(ミ)高位
2.属和音の主音保続低音
の両方を認識する事にした。
裏拍への滑らかな到達、安定6.5:不安定3.5あたりの配分だろうか。
この1拍目の表現は追求するととても難しい。
1拍目裏拍で表拍からの低音レと合わせり
非常に安定的な二短調の主和音根音低位、高位の形となる。

ト短調へ移行。

下属調:ト短調

動機c(3小節目逆行)

3:前小節最終音がアウトタクトとなり、途中まで動機aの逆行で進む。
 ファ#により調性の変化を感じさせる。
 動機aの逆行のため順次上行となり、徐々にエネルギーの高まりを要し、
 クレッシェンドをしてくる。
 この上行進行は4小節目のドに向かい更にシ♭に下がり安定する。それをこの小節からしっかり意識する。
 山登りで小高い丘まで上がり「どっこいしょ」と少し休憩するような感じがシの♭だ。
 この小節も1小節目と同じくあまり和音を感じさせないので
 深く息を吸いこむ一呼吸の間に弾く。ただし急いで弾くわけではない。

4:1拍目表拍は
 1:主和音基本形 倚音(ド)高位
 2:属7の和音 主音保続低音
 とした。
 4度の関係だからだろうか。
 2小節目よりこちらの方が主和音を感じる。
 1拍目裏でト短調主和音ソシ♭レに至るがミも含まれ、
 シ♭が最高音である。
 これは二短調のIV付加6と見ることも出来る。
 この段階では安定性のやや薄いト短調主和音
 と扱うべきだと思うが、次に二短調が来ることを予見させる。
 そのため1拍目裏の和音を2小節目の1拍目裏よりやや強く弾き
 次につながる可能性を示唆したい。

主調:二短調

第7音無し半終止

動機d

5:動機aの順次下行開始音から最終音レで構成。
 動機bの一部の逆行とも言える。
 動機aは跳躍下行があるのでプールの高いスライダーから滑り降りるように少し加速した。
 この小節はそれがないため緩やかに、テンポを安定させて弾くのが自然だと感じる。

この小節も単音のため和音を特定しにくいがIVとした。
 S(サブドミナント)で経過的な箇所。

6:ほぼ中間地点。二短調で半終止。(前半の終わりは8小節2拍目裏と考える)
 強弱は各自の感じる終止率に任せる。
 第7音(ソ)が無い半終止なので性質はそれよりもやや安定だろうか。
 5弦開放ラの倍音と実音ド#の周波数差による響きが気になる場合、
 倍音コントロールをする。した方が良いという訳では無く、
 学んできた感覚に従って欲しい。
 私はここが単音進行+曖昧な和音での締めくりである点。
 次の動機が「今まで無かった重音での連続的な進行」
 「8分音符毎に和音が変化する」「跳躍を中心とした上行」という
 新しい展開で曲が盛り上がる、という複数の理由により
 直前であるこの半終止をできるだけ静かに、安定させて終わらせ区切りとしたい。
 従って16F上での5弦第5倍音のコントロールを行う。

二短調不完全終止的

反行進行

半音解決

減5度

導

主

属

反行進行

主

動機e

曲中最高音

半音進行

F: I

動機e1

7:前半最後の動機と考える。4つ目の小節の動機。この4と言う数字が後半の構成にも関わる。
 締めくりとして盛り上げるためか、8分音符ごとに和音が切り替わる重音進行。
 また、綺麗に両外声が開いていく反行進行である点にも注目したい。
 更に跳躍を中心とした上行で盛り上がり、この曲の2番目に高い12フレットのミに向かう。
 1拍目裏の減5度の響きを覚え、それを意識して欲しい。
 全体で反進行の解放されていく動き、旋律の上行と共に音の強度を上げていき、
 8小節1拍目に向かいたい。
 7小節1拍目表拍の和音に限定進行音である導音ド#があるが、1拍目裏でレに向かわずミに向かう。
 つまり導音が主音に直接繋がらず、回り道をして2拍目の主音レに向かっている。
 そのため継続性が生まれ、収まらず展開していくような音の動きが出来上がっている。
 これは2拍目裏から8小節1拍のドミレ(青)と同じ動きをしており、そちらを弾いて
 それが内声ドミレ(赤)に来ていると捉えると表現作りに役立つかもしれない。

8:V-Iの完全終止ではなく倚音(イ)というミの音が
 Iの和音の最高音となっている。7小節目にも書いた属和音の導音が
 主音に直接繋がらない動きが旋律で再現。
 今回の倚音は終止感の軽減、終止のポイントをずらす役割が大きいと思う。
 1拍目裏で主音レが現れ、薄いが完全終止の形態となる。
 それを意識して絵画の最後の一筆を置くようにレを弾く。
 2拍目裏から第2部へ向かう新しい動機が開始される。
 これは後半新しい展開をしていくに相応しい。
 へ長調に向かう動機であると意識。2小節だけだが、
 この曲で唯一の長調となるためここで音色の変化を付けたい。
 しかし音の強度は徐々に下がっていくのが良いと考える。
 その理由は次に述べる。

9 10 11

平行調：へ長調

動機e' (eの音型的反復)

平行調：へ長調完全終止

動機e" (eの反復)

並行進行

F: V⁷

F: I

動機e2 F: IV

I¹

動機e'1 II

V⁷

動機e'2 I

g: IV

動機e"1

d: -II

9: 単音+和音と言う動機aを1拍:1拍と、よりはっきり対称的にしたような構造。
 単音部は下行、和音部は上行となり、2拍で1つの部分動機となる。
 1つの動機ではあるが、大きな違いがあるため更にe1/e2とした。
 それは読点「、」に満たないが「青く/大きい(空)」など
 同種の役割を持つ2つの連続する形容詞や副詞のように意味は区切られると感じたからだ。
 下行+上行を11小節まで繰り返しながらも緩やかに音域が下降していく。
 それ故、11小節に向け全体で滑らかに落ちていく音域、
 音の強度も弱まっていくように弾きたくない。
 動機e1とe2の表現は様々。平坦に。大きくする。小さくする。
 それらの組み合わせは9通り。
 大きく、小さくの程度を変えればもっと増える。
 私はe1は下行進行と言う点から小さくする、e2は和音、上行並行進行のため、
 やや大きくするを選ぶ。

10: 前の動機eは経過的、e'はへ長調完全終止となりその性質は少し異なる。
 それによりe2とe'2の表現を変化させたいと思う。
 その場合、動機e'2で後の和音を強めない表現が好まれるかもしれない。
 もう一つの表現として音型の反復進行から表現を作るアプローチ。
 すなわち前のe2と同じ、後の和音を強める事で表現の反復も行うという手法もある。
 2拍目裏で二短調下屬調であるト短調の要素が垣間見えるがこれは経過的なもの。
 3回の反復に関連性を持たせ表現を作ると効果的。

11

下屬調：ト短調不完全終止

主調：二短調

動機f

並行進行

導→主音

増2度

増4度

半音解決

半音進行

減7度下行

短7度下行

g: V⁷

d: I

d: V¹

動機e"2

d: IV

g: (3) I

d: V⁷₉

d: I²

V⁷₇

I¹

(5)

H⁷

11: 9, 10小節からの動機eの流れを受け継ぎつつ、二短調に転調し終わりに向かうべく、
 並行進行で上行し最後の盛り上がりを見せる。
 私は11小節2拍目はト短調不完全終止ではなく二短調不完全終止的ながら
 二短調のサブドミナントとして更に発展していくと考える。
 それは13小節、あるいは最終小節15小節までの大きな流れを作る。
 「短い動機の連続ばかりだったので、対照的に最後は長く捉えたい。」
 そう考えたが、ト短調として収め、2拍目裏から新動機f開始と考えるのが正道かもしれない。
 楽譜も動機e"とfで分けている。
 その場合、e"2 V-Iの動きで軽く収め、最後の、新しいfの動機で大きく膨らませる。
 2拍目裏の和音は第9音低位とあまり見えない転回形だが二短調属9の和音と判断する。
 並進行、上行、8分音符ごとの和音の変化、という要素から
 クレッシェンドで重厚な雰囲気に向かいたい。

12: 1拍目で一度並行が途切れ2つの半音進行が見られる。
 私は解決先は主和音第2転回形であるため、ドミナントの一部とみなし
 安定せず更に表現は膨らませる。
 しかし、ここで一度収め、次から新しい展開に向かいたいと考える人がいても
 不思議ではないと考える。
 最後のII7から次の13小節1拍目で半終止する、14, 15小節完全終止する、
 と2通りの終止に繋がるので各終止感の比率を考え表現を作る。
 いずれにしろ高音は次の小節に向け減7度の下行跳躍をするので
 次の小節でエネルギーが一気に抜けるように弱めたい。
 減7度下行の落差をどう表現に結び付けるか。
 工夫がいろいろある楽しいポイント。

13

1. 第7音無し半終止

2. 主調：二短調完全終止

導→主音

半音解決

属→主音

(3) V

(3) V

I

13: 6小節目とほぼ同じ第7音無しの半終止。
 第3音高位の言わば不完全半終止とも言うべき終わり方。
 前の小節からの大きな跳躍下行からの着地をどう表現するか。
 軽く弱く、一気に弱く、間を大きくとる、小さくとる、とらない。
 1回目と2回目とどう差をつけるか考えるのも楽しいだろう。
 色々弾き比べ、終わり方を考えて弾いて欲しい。

14-15: 12小節2拍目から見るとI-II(IVの代理)-V-Iのいつものカデンツのような構成。
 しかし、高音位や音の高低の変化は大きく、言わば応用編とでも言うような流れ。
 倍音コントロールは好みで良い。
 それよりは14小節の5弦開放を15小節でどう扱うかを検討して欲しい。
 属和音を2拍伸ばし完全終止に至るため、減衰を合わせる点も
 通常の曲より繊細に扱う必要があるだろう。
 最後の8分休符の間を取る事まで含め演奏と考え、しっかり締めくくる。